

僕は神になりたかった。神になるには僕のための宇宙が必要だった。

宇宙を作り出すために、わざわざマニュアルを見る必要はない。宇宙の開闢のための言葉は決まっている。

「光、あれ！」

突然目の前が真っ白になり、気がつくやうに宇宙はあつと言つ間に膨らんでいた。

こうして僕の宇宙ができた。

マニュアルによると、今のところ僕はこの宇宙において唯一無二の存在なので、潜在的には神であることに成功しているらしい。「らしい」というのは、神としての僕の存在が確定していないからだ。神としての存在を確定するには、宇宙の存在が確定されなければならない。そのためには、宇宙の中に十分な数の観察者がいなくてはならない。

次のページ、宇宙のパラメータ。

十分な数の観察者の存在は、最適な宇宙のパラメータ群の設定によって可能になる。宇

宙を操作し、パラメータ群を確定させた上で、観察者を進化させなければならない。

「観察すればいいんだろ？」

横から口を挟む奴がいる。そっちを見ると僕に似た顔がそこにあつた。

「俺が観察してやるよ」

僕の頭の中から出てきたのか、僕に似ているけれど、鋭い牙も、尖った耳もないその顔は、いかにもひ弱そうに見える。

マニユアルにはこう書いてある。あなたの意識から生まれた自己言及的な観察者は、宇宙を安定させる観察者として不適切なので、もし観察されたらすぐに削除しなければいけません。

「おまえの存在が、不適切だつてさ」

デリート。

注釈がポップアップする。自己言及的な観察者の削除は容易ですが、意図しないときに、自律的に復元することがありますので、十分注意してください。

注釈は気になつたけれど、横道にそれると先に進めなくなりそうなので、僕は気を取り直してマニユアルに戻る。

適切な観察者を生じるには、宇宙のパラメータ群を適切な範囲に設定しなければならな

い。プランク定数とか、光速度とか、そんなモノだ。適切な範囲とは、観察者が進化するために必要な時間の間、宇宙が存続できるような範囲のことで、熱すぎず、冷たすぎず、重すぎず、軽すぎず、希薄すぎず、濃厚すぎず。わからなければ手を突っ込んで様子をみる。

書いてあるとおりをやってみる。宇宙に右手を突っ込んで伝わる感触は、何となく良さそうな気がするけれど、今一つ自信がない。

自分を信じること！

マニュアルから文字が浮かぶ。その指示に従う。つまり、マニュアルを信じて自分を信じることにする。

手が濡れたような、痺れるような、熱いような、冷たいような、さらさらしているような、べとついているような、いい気持ちのような、気持ち悪いような。目の前でページがめくれて、次の章に進む。

「原初の渦流」

右手を宇宙に突っ込んだまま、宇宙をかき混ぜること。

「あれっ、手はもう抜いちゃってるよ」と、声が出た。さっき消去したはずの、僕に似た顔がそこにあつた。

「わかつてるよ、もう一回混ぜればいいんだろ？」

あらためて右手を突っ込んで、かき回す。

渦流は強すぎず、弱すぎず。十分に大きな渦ができたらしばらく放置すること。

百億年が経過した。

僕はマニユアルに突っ伏して寝ていた。涎に濡れたマニユアルは、微妙に波打っている。

「よく寝てたねえ」と僕に似た顔が言う。

「だつたら起こせよ」

「いいところまで進めておいてやったぜ」

僕は手元のマニユアルを見る。次の章は星の誕生だったけれど、それはもう終わっており、宇宙には無数の星が光っている。

「惑星の生成も終わってるよ」

ズームインすると、僕の宇宙では小さな岩が恒星を巡っている。

あわててマニユアルのページをめくる。

次のページ、観察者の発生だ。観察者は知性を有していなければいけない。

「知性のある生き物はある？」と、僕は聞いてみる。

「それはまだ」との答え。

僕は星系をよく見る。惑星の公転を追いながら見ていると、めまいがしそうな気分になった。

「生き物がいるのはこの惑星？」

首をひねって僕は聞く。僕が思ったのは赤い星で、その星系の第四惑星だった。

「第三惑星が正解」

観察者の発生には、海が存在が適しているでしょう。

海。たつぷりとした水。雲が流れて影を落とす。確かに第三惑星には海があった。

「もつとズームして見たら？」

マニュアルに書いてある。観察者の発生はデリケートな過程です。慎重に作業を進めましょう。あなたに似ていないものは失敗です。

海の中には多くの生物がいた。百八つの目が光り、千本の触手が揺れている。

「失敗だあ！」

僕の姿には似てもにつかない不定形の生物たち。僕は手近な小惑星を、海の中に放り込む。

目の前で海が泡立つ。

「君つて乱暴だね」と。

「これは僕の世界だ」

「でも、マニユアルをよく読んだ方がいいと思うよ」

したり顔のアドバイス。

最初にできたものが似ていなくても、あきらめてはいけません。辛抱強く育ててください。それから、海のある世界は貴重です。水を無駄にしないようにしましょう。

僕はあわてて海の底から赤熱した隕石を取り出す。

「大丈夫だ。まだ底の方で生きてるぜ」

奇妙な生き物はずいぶんと減ったけれど、海の底から恨みがましく見上げている生き物がいた。皮膚はぬるぬるだけど、目は二つだ。

あなたに似せて観察者を育てましょう。鰭を手にして、足にして、柔らかな皮膚はしっかりと。僕はその生物に、鋭い鉤爪を作る。

「おい待てよ」と彼が言う。「マニユアルをちゃんと読めよ。「あなたに似せて」って書いてあるんだぜ」

生物は陸に上がり、歩き回り、走り回り、空を飛ぶ。鋭い鉤爪で切り裂き、牙が貫く。今のところしっぽの先を踏まれても、明日にならないと気がつかないくらい鈍いけれど、

そのうち賢くなれば、僕そっくりになりそうに見えた。

「僕そっくりになりそうじゃないか」

「判つてないね。同じじゃいけないんだよ。まったく同じじゃ君は神になれないのさ」

確かに全体は違っているけど、部分部分はそっくりだ。鋭い鉤爪や、明るい針のように細くなる瞳孔は、完全に同じと言ってもいいくらい。

「このままだったら失敗だ。やり直した方がいいと思うぜ」

「失敗？」

彼にそう言われるとそんな気もする。

「同じじゃだめだ。似てなくちゃ」

「じゃあ、リセットする？」

「でも、水は貴重だ。今度は慎重にな」

さっきの隕石よりずっと小さいのを一つ。陸に落とすと目に埃が入った。

「あれなんかどう思う？」

惑星を覆った埃が収まると、僕は森の陰にちょうど良さそうな生き物を見つけた。

「いい感じだね」

木陰でおどおどしていた。

脆弱な生物を選ぶこと。脆弱な生物は、警戒心が強いため、知性の発達も早く、神のよ  
い崇拜者になることでしょう。

「そうだね」

知性の発達を促すため、少しだけ僕は手を貸す。親指を他の指と対向させ、物をつかめ  
るようにする。脊柱をS字にカーブさせ、直立できるようにする。生き物は森を出て、貧  
弱な二本足で立ち上がる。

部分部分は全然違う。でも、全体の感じは何となく僕に似ている。角はないけれど、頭  
も大きいし、額も広い。顔の前方にある二つの目は、まっすぐに前を見ている。

「この生き物でいいかな？」

「いいと思うよ」

この生き物を文明化する。これで宇宙は観察され、僕は神になる。

「さ、急ぎなよ」

僕はその生物に火を与え、言葉を与え、文字を与える。進化したその生き物によって本  
が書かれ、その中にはこう記述される。

神はその姿に似せて……。



「うまくいったかな？」

「大成功だと思つよ」

翼も角も、鉤のついたしっぽもなく、鋭い牙も爪もない。耳も尖つちやいないし、滑らかな肌は弱そうで、きらきら光る鱗もない。でも、僕が作った観察者は、二本の足で立ち、二本の腕を持つてゐる。瞳孔は丸いけど、顔の正面には二つの目がある。

全体は似てるけど、同じじゃない。

惑星の夜の側に街の明かりが光つていた。もう、望遠鏡を作つて宇宙の観察を始めてゐる頃だろう。

「そろそろいいかな？」

「いいと思つよ」

そう言つて彼はにやりと笑つ。

僕は真っ黒で大きな翼を広げ、惑星に向かつて降りていく。観察され、神として崇拜される、そのために。